

## 海軍大尉田結保という男がいた

杉山 和男 Kazuo Sugiyama

(財)国際貿易投資研究所 理事長

- ただ一度逢っただけ、短い時間その話を聴いただけなのに、強い印象を残し、折に触れ脳裏に甦る人間というものがある。太平洋の戦も敗色濃くなった昭和 19 年(1944 年)2 月、当時都立一中(現在の日比谷高校の前身で昭和 18 年 7 月、府中一中から名称が都立に変わった)4 年生だった我々の前に現れ、短い訓示をし、同年 10 月レイテ沖海戦で巡洋艦筑摩と運命を共にした海軍中尉(没後大尉)田結保<sup>たゆいたもつ</sup>という男は、我々にとってそういう人であった。
- 私は彼の名前だけはすでに知っていた。昭和 17 年 11 月江田島の海軍兵学校(兵科士官養成校)第 71 期生の卒業式が実況放送され、卒業生 581 名のトップとして彼の名前が呼ばれ、我々の中学の卒業生だと解説があったのを聴いていたからである。軍楽隊により荘重な「勝利の曲」が奏される中、天皇名代の高松宮に敬礼した後、御付武官から海軍軍人の栄誉の象徴である恩賜の短剣を伝達された首席卒業の新少尉候補生が田結保であった。更にその翌日の英語の授業の時間、当時受験英語の著者として名高く、また厳格な英才教育的授業で時々我々を震え上がらせていた蒔田栄一という先生が開口一番、「君達は昨日のラジオ放送を聴いたか。恩賜の首席田結は君達の先輩だ。おれは時々あのような英才が現れるのを楽しみにこの学校に来て

---

いるのだ。」と語り、もう一度田結(タユイ)という名を耳にしたのだった。

○その田結という先輩の海軍士官が突然母校を訪れて来たらしく、我々のクラス全員が校庭に整列させられ、田結が朝礼の時などに使う号令台の上に立ち、10分か15分位の短い訓話をした。それから半世紀の歳月が流れた平成7年(1995年)、有志の骨折りで中学卒業50年を期して約100人の同級生の一中時代の思い出を中心とする回想文集が出来上がった。その中で私は冒頭に書いたように強い印象を残した田結先輩のことを中心に短文を寄せたのだが、驚いたことに、私同様にあの場面でしか彼に会ったことのない熊代邦男君と小林善彦君(注1)の2人の同級生も彼のことを書いていたのである。3人が50年後この先輩について何を書いたのか、そしてその後日談などについて述べてみたい。

○先ず私自身の回想記であるが、原文は原稿字数の制約のため意を尽さぬ所があるので、ここでは少し補足して、云わんとしたことを御紹介したい。「号令台上に立った彼は第1種軍装を着用していた。当時の海軍士官の第1種軍装は、映画(男たちの大和)などを御覧になった方には説明する必要はないが、学習院の生徒などが今も着ている(一中の制服も同じだったが)上着の前ボタンがなく、ホックで留める型で、全体が濃紺色だが、衿と正面のホック上の直線部分と上着の裾部分が濃い黒味がかった厚い綿のモールで縁取られていた。(トリミング=玉縁飾りというそうである。)永田町の我々の中学の付近には、海軍省や軍令部、また水交社などがあったから、この軍服を着た海軍士官の姿は日常よく目にしていた。ところが彼が着用していた軍服の色は、それとは全く異なる、初めて見るものであつ

た。モールの縁飾りの部分の黒に近い濃紺色だけは普通と変わらぬ色であるが、その他の部分は全く色褪せて、紺色ではなく、コバルトブルーというか、秋の青空の色というか、水色といったらよいか、モール部分と際立って異なる鮮やかな色彩であった。戦艦武蔵の艦上で当直士官などの際着用し、南太平洋の強烈な日光や潮風のためすっかり変色したのではないかと推測した。その軍服姿は、南の戦陣から今帰ってきたことを一目で語るに十分なものだと感じさせた。ところが、その姿とは全く対照的に、彼の語った言葉は音声も内容も全く静かで落ち着いたもので、我々の心にしみ通った。〔君達は戦争のことなどと関係なく、日々の勉強に着実に勤しんで欲しい〕という言葉が特に私の記憶に残った。朝から晩まで新聞もラジオも戦争の話一色で、鬼畜米英との世紀の決戦のためすべてを捧げよと絶叫されていた世相の中で、海軍を象徴するような先輩青年士官が、最前線の戦陣の只中から帰ってきたという風姿で語ったその静かな言葉は、私に心底から深い感銘を与えるものであった。」

○同じ場面を回想集に寄稿した熊代君と小林君の文章は、一部省略するが、主な箇所をここにそのまま引用させて頂く。まず熊代君は「高見順と田結保」と題して次のように書いている。

「西村校長は、一中が日本のジョン・イートン校であり、生徒諸君はすべからくジェントルマンたれと教えた。(中略)我々の入学した昭和15年は紀元2600年に当たるとして、政府、マスコミ挙げて(金鷄輝く日本の栄えある光身に受けて)と大々的な宣伝を行った。この年日独伊3国同盟が結ばれたが、一中にはこの時流に便乗しない“市民的自由を尊ぶ精神”が存在していたのである。(中略)こうした戦時下の生活の中で、重なり合って記憶に残る2つのことを記しておきたい。」として、「一つ

---

---

は昭和 18 年 4 月のビルマ報道班員だった高見順（一中大正 13 年卒）の帰国講話で、この高名な作家が開口一番“毛唐の野郎が……”と大喝し満場シーンと静まり返ったこと、それからビルマ戦線での日本軍の苦闘を語ったが、高見順日記にその要旨を「現在すでに兵隊であるという気持ちで毎日を送って欲しい。兵隊の心を心として毎日を送って欲しい。その上で前線に感謝を送る。これが本当の軍人援護の精神だ。」と書いており、今この文章を読むと戦時下官憲の圧迫を受けながら“細雪”の執筆に没頭していた谷崎潤一郎（明治 38 年一中卒）の反時代的な姿勢を思い起こさずにはいられない。それはともかく海軍志望の軍国少年も高見順のあまりに熱っぽい調子に違和感を覚えたのである。（筆者自身も全く同感だった。）と述べた後、「高見との対比で記憶に残るのが田結保（昭和 15 年卒）のことである。翌昭和 19 年 2 月と推定されるある日、田結海軍中尉が突然母校を訪ねてきた。

海軍兵学校をずっと首席で通した田結は、海軍志望者にとって憧憬の人物であった。午後の授業始めに校庭で彼の話聞いたのははっきりしているが、どの位の生徒が集まったのかは定かでない。この時田結は、海兵や陸士に行くばかりが道ではなく、一中生には国に尽くすいろいろな道があることを諄々と説いた。その話には当時の軍人に特有な狂信さが全く感じられず、こちらが拍子抜けしたほどである。これが同年 10 月フィリピン沖海戦において 21 歳で戦死した田結の我々後輩に残した遺言となった。（中略）「我々は幸いにして生き残ったが、田結をはじめ多くの先輩を失ったこの 15 年戦争とは何であったのか、その意味を噛みしめている昨今である。」

○もう一人の小林君の回想記は「ささやかな抵抗の記」と題し、

兵学校を受けるようにと訓示をした羽生新校長の家を、抗議をし真意をただそうと3人連れで訪問した話が主題なのだが、その前半の部分で、5年生になり、これから授業がなくなり工場へ勤労働員されることが決まった頃、一中から兵学校に入った先輩6、7名が現れ兵学校の宣伝を始めたことを書いている。

「彼等は皆兵学校の制服を着て胸を張って反っくり返り、両手のこぶしを握りしめ、まるで肩に衣紋掛けが入っているような姿勢で、我々に向かって語りかけ、というよりどなりかけたのである。〔貴様らあ、兵学校に来おい〕、〔兵学校はいいぞお生活は充実しとる。めしもうまいぞお〕この単細胞のような人達を眺めながら、私はそれよりかなり前、これも一中の先輩で兵学校を首席で卒業した田結保という人が、ある日全校生徒に向かって話したのを思い出していた。田結さんはその時どなりも威張りもせず〔一中の校風は自由であり、それは素晴らしいことだ〕と言ったのである。『自由』といただけで下手すると手が後ろへまわる時代であったから、この言葉の印象は強烈であった。同じ兵学校でも首席は違うなと思ったものである。」

○私を含め3人とも、文集が出来上がってから、期せずして50年前に一度だけ会った先輩に関する回想文を書いたことを知り驚いたのであるが、後日ある新聞の書評で田結のことに触れた熊代君に宛てて、戦艦武蔵で田結の部下の水兵だった宮腰さんという方からの手紙がきた。田結の人柄が判る内容なのでその要旨を記しておきたい。

宮腰さんは昭和18年9月対空機銃要員として武蔵乗組みとなったが、その時の直属上官である分隊長が田結で、宮腰さんが海軍に入る前に定時制中学で習う予定だった英語や漢文の教科書を持っているのを見て、古参兵に見付けられたら大変だ

---

---

とってこれを自ら預かり、週に一度は私室に呼び、この本を使って講義をしてくれた。さらに機銃分隊としては極めて異例なことだが、適性があるとして海軍経理学校普通科練習生への受験を奨め、合格した宮腰さんを内地に送り返してくれた。

昭和 19 年 1 月トラック島から戦艦大和に便乗して内地へ向かう時、手を握り、しっかり勉強しろよと言ってくれた田結さんの凛々しい表情が今でも目に焼き付いている。一水兵にとって中尉は雲上人のような存在なのに、多忙な戦務の中で色々教えられたこと、内地に返されたことは望外の幸であったが、戦死されたということしか知らなかったというお手紙だったという。

- 田結は大正 12 年 1 月に生まれ、「戦艦大和ノ最後」の著者吉田満氏も同年同月生まれである。）昭和 14 年 12 月兵学校に入校、17 年 11 月 71 期生として卒業後、18 年 2 月連合艦隊旗艦となっていた戦艦武蔵に乗組み、19 年 2 月海軍中尉となり、同年 7 月、巡洋艦筑摩の対空射撃指揮官である高角砲機銃分隊長に転勤した。「筑摩」は三菱長崎造船所で昭和 14 年に竣工、排水量 1 万 1900t の甲種巡洋艦であり、20 センチ連装砲塔 4 基を甲板前部に集中配置し、後甲板から偵察機 6 機を発進できるようにした索敵能力重視の〔航空巡洋艦〕とも呼ばれた新鋭艦であり、私も開戦一周年の新聞各紙の一面で波濤を蹴立てて全力航行中のその勇姿にはじめて接し、(その時その艦が筑摩とは知らなかったが、) 母衣を背にした逞しくも美しい戦国の騎馬武者の姿を連想し惚れ惚れと見入った記憶がある。その筑摩はハワイにはじまる殆どの海戦に参加し、索敵と砲戦に奮戦したが、呉で整備後田結を乗せてから、10 月連合艦隊の総力を挙げた最後の戦、レイテ沖海戦に参加した。そして僚艦利根と

共に最先頭に立って敵艦隊に猛攻を加えたが、左舷艦尾に受けた魚雷のため舵故障となり、大和の後退（今もなお栗田艦隊謎の反転といわれる。）の後敵機の集中攻撃を受けて沈没、その救援に赴いた駆逐艦野分もまた消息不明となり、漂流中救助された下士官一名を除き、両艦の乗員は全員帰らなかったため、田結の最後も不明である。日本の造艦技術の粋を尽くした筑摩がたった一発の魚雷であの雄姿を消したこともあまりに空しく味気なく感じられるが、それ以上に、1500 人の乗員とともに、全弾打尽したという激しい対空戦で討死した 21 歳の若武者田結のことが、今日でも誠に惜しまれ、鎮魂の祈りを捧げたいと思う。（注 2）

- 田結が兵学校を終始首席で通し、将来を嘱望される人材だったことにはすでに何度も触れたが、私は一般論としては学校時代の成績が良かったということだけでその人物が優秀だなどとは思っていない。確かにそれはその人物の天分や努力を示す一つのメルクマルではありうる。しかし、人間の資質は学校の成績だけでは判断できないし、また、卒業後の 20 代、30 代等で良くも悪くも変化していくものであると思う。従って、20 歳位までの学校の成績が、その後の序列や昇進、配置決定のための最も重要な基準となったという話をよくきくが、そうだとすれば、日本帝国の陸海軍幹部の人事システムの重大な欠陥だったとすら思っている。しかし、田結の同期生の方などの書き残しているのを見ると、田結は少しもガツガツ勉強のみしていた様子はなく、恐らくは授業中や予習復習の勉強を効率的に実行していたものと思われ、試験の直前に自分のノートを友人に貸すなど余裕を持って好成績をあげていたようであり、一方柔道、水泳などあらゆる体育課目でも優秀さを示し、いわば文武

---

両道で無理なくトップを続けたものと推測される。また私自身の経験から、(海軍経理学校に終戦時まで1年弱いた。)、上級生あるいは上官、古年兵などによる猛烈な私的制裁は、旧日本軍隊における最悪劣な慣習とと思っているが、田結がそんな行動に参加したのを見た人はいなかったのみならず、前述の宮腰さんのお手紙によれば、武蔵の分隊士として下士官、古年兵に私的制裁を止めるよう切々と訴えたこともあるという。私の知る限りにおいて、能力からみても人柄からいっても、帝国海軍が続けば、その将来を荷う真のエリートであったと推測する。

○歴史に if という話をしてあまり意味はないと平生思っていたが、先頃伊藤之雄著「政党政治と天皇」で、最初の平民宰相原敬がもし暗殺されずに西園寺公望と共に、またはその跡を継ぎ、内府や元老になっていたら、若き昭和天皇を支え、対中国戦、対米英戦へのコースを変えることができたであろうという記述を読みながら、もし田結のような男が、開戦時の帝国海軍の首脳になっていたら、太平洋での戦は避けられたかもしれないと思った。いうまでもなく太平洋の戦の主役は海軍なのだから、その海軍がはっきりと勝てる見込みがないこと、従って戦うべきでないことを明言せず開戦に同意するに到ったことは誠に無責任であるという他はない。

○無謀な戦争に徴兵や召集で駆り出され、運が悪ければ散々酷使された上、餓死や病死した多数の人々のことを思えば、祖国の存亡の危機において、人間として、戦士としての榮譽を失うことなく最後まで戦って死ねたことは、職業軍人としての道を選んだ以上、田結はむしろ幸運だったともいえよう。また兵学校71期の卒業生である若い士官達は最も使い頃だったかのように、581人中331人が戦死したというのであるから、その代表

者たる田結の戦死は誠に止むを得なかったものともいえよう。しかしなお、当時中学生だった私達の前に立った若き海軍士官の姿は、将来の日本に必要な有為のエリートの象徴として今もなお脳裏に残っている。

そして思う。我が国がこれからの国際社会で恥ずかしからぬ国として存続するために最も必要なことの一つは、国民一人一人の努力を無駄にさせないようなリーダー、即ちノーブレスオブリージの覚悟を持ち、総合的判断を誤らない英才、エリートをどうしたら確保できるかということであろう。弱者を保護するための論議や対策はもちろん必要であるが、その反面エリート確保のための対策も真剣に考えられ、論じられるべきではないだろうか。

○最後に田結さんの御母堂の詠まれた歌二首を掲げておきたい。

- ・ 成すことのあまたありしを国のため  
つぼみのままに散りし吾子ほも
  
- ・ つはものの母にはあれど我もまた  
子をもつ母の一人なりけり

(注1) 熊代邦男君は「相良竜介」のペンネームで多くの著書のある評論家。小林善彦君は東京大学名誉教授で、財団法人日仏会館の副理事長。

(注2) 巡洋艦筑摩については豊田穰氏著「航空巡洋艦利根、筑摩の死闘」（講談社発行）が詳しい。また本稿記述に当っては依田實氏著「田結保」（花林書房発行）を参考とさせて頂いた。